近江の水をめぐる 2

石川 亮

近江の水をめぐる 2

石川 亮

Title :
The Water of Omi : Part Two

Summary :
I began making artworks using water I collected from springs throughout Shiga Prefecture in 2010. This marked the start of what has become my ongoing investigation of the background and roots of the various springs of Shiga Prefecture, most of which have names that can be traced back to traditional stories, area names, and the like. The focus of my current research is on the life that sprang up around water sources and the cultures to which the water gave rise.

近江の地における水探求は二〇一〇年から始めている。

造形表現を主たる研究とする私が何故このテーマに着手したか少し振り返っておきたい。大きな理由は遡って二〇〇七年にスイス・ジュネーヴのレマン湖畔で行なわれた水をテーマにした展覧会に作品を出品する機会に恵まれた。水を作品の重要な要素として扱うようになったのはこの時期からである。作品プランはびわ湖とレマン湖、双方の水を汲み、一度凍らした二つの水を少し離して一つのプレートに設置する。やがて二つの水（氷）が外気に触れ溶け出し、双方は表面積を広げ張力に引き合い、やがて一つの塊となる。この一連のプロセスをみせる状況設定が作品である。

作品名を「全体―水」と題することにした。固有の文化や歴史とくらしを背負った双方の水（氷）が時間と共に形態を崩しながら一つの水溜りになる。その時点で固有性を失い、何処のモノでもない只の水となるのだ。「唯一無二の固有の存在」と「全てを包括する名も無き存在」という観念を造形表現として表出しようとするものである。

次に近江（滋賀県）に戻った私は太湖を前にしながら四方八方から集ってくる「近江の水源」を想像した。一一八本の一級

河川が流れ込み瀬田川一本が出口となって下流域を潤していくのである。人々のくらしや生業は太湖に注がれる川沿いや湖岸沿いを囲うように育まれて来たのであろう。更に上流の方へ、くらしや生業と一体化した水場へと興味を向ける事となった。近江のくらしは一極集中になり得ない、一つひとつの生活が、びわ湖全体の生活であるのではないだろうか、「個であり全体である」水に迫ってみる。

一、結いの水、集いの水（ゆいのみず、つどいのみず）―

地域の人々によって長く親しまれ生活に使われてきたことは当然のことであるが、その歴史が受継がれ証明してきたことにより、史跡や文化財的な存在感を放つこととなった水場に焦点を当てる。

その前に私が湧き水を汲む時に必ず行う記録から話を進めると、当然の事ながら写真撮影を行うのであるがその決まり事は三点である。一つ目は水が湧き出る様子と周辺の景色全体を画面に取り入れ、水場がどのような環境であるかを撮影する。その理由はこの環境が今日現在は保たれているが、近い将来その状態が維持されているかわからないからである。次に私自身が湧き水を汲む様子を同行者が撮影する。当然のことながら確実に自身がその湧水を汲水（きっすい）していることの証明として、である。最後に取水口のアップ、或は湧き出る水面の様子を撮影する。これも一つ目同様、湧水量や透明度、その豊富さを記録しておく必要があると考えるからである。昨今の気象変動、環境の異変により予期せぬ災害で、いつまでもこの状態が持続するとは限らないという懸念から写真撮影を必ず行い、記録する事にしている。話は戻るが、前述したように、地域の人々によって絶えず見守られ、祭りやイベントの拠点として「集う場」となり「結い」が形成され、結果として比較的名の知れた場所となった湧水に迫ることにする。

堂来清水（どうらいしょうず）

長浜市（旧浅井町）の草野川沿い県道２６４号線を北上し、県道終点の集落、高山の北にある。発電所を過ぎた辺に白竜神社がある。石祠の裏手に一段低い窪地があり、その地表の割れ目から勢い良く湧き上る水場が堂来清水である。草野川上流の北西には己高山、対して北東方向には県下第二峰の金糞岳がそびえている。水場の脇には堂来地蔵尊が祀られており、地元の人々の神仏への厚い信仰と共に受け継がれて来た湧き水であることはすぐに想像がついた。二〇一〇年の冬に始めて訪れてから幾度か前を通る度に水を汲んでみるのであるが、いつも一定の水が湧き出ており、一日の湧水量は一七〇〇トンにも及ぶそうだ。

岩場の間に柄杓をあて水を汲み、ふと見上げるとここにも立派な名を冠した石碑と比較的新しい紹介看板が設置されていた。

読むと、

「平成の名水　堂来清水の由来　●永年にわたって地元高山町の水環境保全活動が認められ、二〇〇九年環境省から、平成の水百選に認定された。●遠く三国峠の夜叉ケ池を姉池とし、榧谷山腹の妹池に発すると伝えられている。●往古より湧き出て年間水量に大きな変化はなく、道行く人々の心を癒し、渇きを満たしている接する堂来地蔵尊は、厚い信仰の対象となっている。●時代の変遷を経て地元では神事の洗米水としても活かされていて、遠方からは清澄な水を求め訪れる人は多い。二〇〇九年（平成二十一年）十月　長浜市役所　高山町自治会」

とある。

地元高校で教師を勤めてこられた松井善和さんに話を伺うと「となりの地蔵と共に信仰の対象である湧き水は、神事（オコナイ）という行事で、モチ米を洗う水として使われ、真冬の湧水は特に『寒の水』と呼ばれ長期間の保存に堪え、地元では一升瓶などに入れ冷暗所で保存し、夏季等の上客へのお茶用など特別な用途の水に使う。」とのこと。また、言い伝えによるとその昔、奥の池の周辺が干ばつで農民が餓死寸前にまで追い込まれた時期があったという。野瀬の天吉寺山の草庵の一つである「月の坊」という寺の住職、槻之坊がこの危機に村人とともに奥の池に住む龍神に雨乞いをした。そのころからふもとの堂来で水が湧くようになったという。この伝説から清水は別名「白龍霊水」とも呼ばれる。堂来清水の手前には白竜神社が奉られているのはこの説話に由来するとわかった。この集落の水を介した繁栄と信仰は一体となっているのだと感じながら、水をもう一汲みした。

堂来地蔵の横で水を汲む。堂来清水

堂来清水の由来

秋葉の水（あきばのみず）

高島市安曇川町を流れる安曇川沿いを上流へ、県道23号線を走ると中野と記されたバス停に出会う。そこを左折すると集落に入る。更に進むと山裾に突き当たる。気をつけて歩いていると水の音が聞こえてくる。囲いがきちんと組まれており、入り口の石段を下りていくと水場がある。竹の取水口から常時一定の水が出ており、浅めの石製風呂が水を受けている。見上げる

と正面には「秋葉の水」と刻まれた立派な石標が立っていた。

「秋葉（あきば）」や「愛宕（あたご）」と聞くと火伏せの神様を連想するが、水と組み合わさった名称は不思議な感がする。「ひょっとして」と思い、辺を見回すと石標の上部左側に小道を見つけた。やはりその先に祠がある。秋葉神社だ。

地元の清水安治さんにお話を聞くことができた。「あまりの冷たさに瓜も割れてしまう程」と昔は呼ばれ、「瓜割の水」と呼ばれていたとお話された。比良山系の阿弥陀山を水源とし、以前は集落の生活用水として使用されていたようで、水道が整備されてから次第に使われなくなり、一九九八年にコンクリートで蓋をされてしまったとか。二〇〇四年、「かつての湧水を取り戻したい」という地元の人々の思いから復活したそうだ。敷地内には当時の子供たちの手を象ったレリーフがはめ込まれ、「二〇〇四年のわたしたち／秋葉の水完成記念」と記されたモニュメントが立っていた。

二〇一三年夏、清水さんから素敵なチラシを戴いた。「おいしい秋葉の水で流しそうめん」と書かれたイラスト付きの案内である。お盆休み明けの土曜日に毎年恒例になっているようだ。当日、妻と車で出かけると、たくさんの人が水場の周りに集まっている。秋葉の水から流しそうめんが始まっており、脇の小さな広場ではテントが張られ、かき氷や地元夏野菜の天ぷら盛り合わせなどが用意されていた。どうやら地元の人以外に遠方からイベントを聞きつけ、駆けつけている人もたくさんいるようだ。

ここでは地元の人々の手で湧き水を復活させたことに留まらず、便利追求や効率を優先し、失いつつある人間本来のコミュニケーションを回復する試みが少しずつ結ばれているのだと感じながら、そうめんをいただいた。

秋葉の水、道沿いの凹んだところ

「秋葉の水」で催された流しそうめんの集い

秋葉の水、石碑がある

萩の玉川（はぎのたまがわ）

草津市野路、ＪＲ南草津駅より南方へ徒歩十分程度、国道1号線野路中央の交差点へ差し掛かる手前に、車がギリギリすれ違える程の道がある。そこから大津方向へ少し歩いた道沿いに湧水公園を発見した。二〇一〇年に始めて訪れた時は今程にウェブサイトで紹介もされておらず、この辺をウロウロしたことを思い出す。もう少しこの道を北上し集落に入ったところに若宮と呼ばれる社を見つけた。様子を見ていると、前日に何か祭礼があったらしくその後始末をされている人を見かけた。「この人が何か知っているはず！」直感が働きお話を聞いてみた。「野路の玉川のことか！今はもう出てないぞ！わしが子どもの頃にちょっと出ていたようやが・・・今は湧き水やないがこの道をもう少し大津の方へ行ったら史跡になっている。何年か前にそういう場所があったことを残そうということで地元の人らで復活させたようや！」と話してくれた。それ以上聞くとお仕事の邪魔になると思い、これ以上の質問は出来なかったが、言われた通り行くと、「野路・萩の玉川」と書かれた案内表示のある史跡が現れた。敷地内は植栽と庭石がバランスよく配置されて、奥の方には東屋がある。道路側に面した入口付近に石柱が立っており、「玉川」と彫られている。湧水は四角い水場から小川となって流れ小池に注がれている。どうやら水はポンプアップされ巡回しているようである。

滋賀県立玉川高校が作成した地域の文化を紹介するウェブサイトの一ページを見つけ出した。学校の概要に「玉川の由来」としてあげられているので紹介したい。

「野路の玉川古跡について」

中世において、東海道と東山道の分岐点で戦略上でも重要な地にあり、宿駅として重要な位置を占めた。室町時代には草津が交通の要衝となり、しだいに江戸時代にその地位を草津宿に譲った。

諸国六玉川の一つ「野路の玉川」は近江の萩の名所であったことから「萩の玉川」とも呼ばれ、平安・鎌倉時代の紀行文・和歌にしばしば登場した。弁天池と十禅寺川の間に水の湧き出る名泉：玉川（小池）があったが、現在はあたり一面に咲き匂う萩のみが面影を残している。

「玉川」の名称については、聖徳太子が仏法興隆のため御幸された時に、馬に水を呑ませるために笏で萩原を穿つと、たちまち清水湧きいでて、玉の姿をなせしゆえとか。

また、王城の地から一日行程の近距離にあるため、古今の有名無名文人墨客が来遊、詩歌に興じていた。古い歴史にはぐくまれた古跡なるため、多くの絵図・紀行・詩歌・伝説にめぐまれ、江戸時代にまた多くの浮世絵師たちは作画を競った。

「近江むかし話」（滋賀県社会福祉協議会・老人クラブ連合会共編）にも玉川の水があまりにもきれいであったこと

が言い伝えられている程である。

滋賀県百科事典（大和書房）より

その他、和歌の紹介等つづくが今回は省略する。更にもう一つ、野路町内会が作成するウェブサイトには、〝「野路の玉川」保存のあゆみ〟と題したページがある。そこには既に江戸時代に、村人が瓦版で旅人に玉川の紹介をつとめている。明治三三年には村長が中心となって保存会を作っている。昭和十一年頃地元の有志が玉川復興会を結成し復元整備を図った。更に昭和五一年十一月には野路町内会が古図にもとづいて復元工事を実施している。そして現在の史跡は草津市の協力を得て、平成五年三月二五日に完成した。と記されている。

改めて述べておきたいことは、ここでは本当の湧水は既に出ていないが、この地が歴史の変遷を経て、地域文化を人々にしっかりと今日の方法で伝え、受け継がれていることである。そして現在に至っても地域の誰かが整備を持続されていることである。

今回紹介した「水」は、かたちは違うが水場に対する思いや持続可能な在り方をそれぞれの方法で実践されているところである。これは一個人の力では到底なし得ないことであろう。地域の人々の結いの精神が水に対しても同じように思いをいだき、生活に必要なことは当然のこと、心の拠り所としての「水」なのである。

萩の玉川の石柱

四角い取水口で水を汲む。萩の玉川

旧東山道（中山道）沿いに復活した。萩の玉川

二、峠の水、境の水（とうげのみず、さかいのみず）――

近江（滋賀）は西に京の都、南東方向には伊勢、北は北陸と交通の要衝であり、分岐点に位置していた事は言うまでもない。太湖が真ん中にあることから、その周囲に沿って主要な街道が通っている。古人は京や伊勢に足を運ぶ途中、或は国へ帰る途中、湖を眺め、疲れを癒し、一杯の水を口に含んだのではない

だろうか、そのような国境（県境）近くの分岐点に差し掛かったところに出現する水を紹介したい。

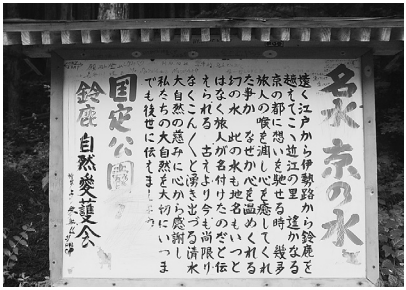
「近江の水をめぐる」私が決める鉄則の一つに、現在の滋賀県にありながら、びわ湖の方へ流れている水であることを抑えておきたい。中には県域にありながら京都や岐阜方向に流れる水も確認しているが今回は省く事にした。

名水 京の水（めいすい きょうのみず）

東近江市（旧永源寺町）の愛知川沿い国道４２１号線を東へ、永源寺ダムを越え、更に進むと近年道路整備が進み道幅が広くなる。並走する愛知川は蛇行を始め、辺は山深くなってくる。その間、京の水何キロと所々に表示がされる。杠葉尾（ゆずりお）の辺に側道があり、そこを少し入ったところ、木々が覆い茂る山側から勢いよく水が流れ出ている。数回この地を訪れているが、スムーズに水を汲むことができた試しがない。側道に車を止め、ポリタンクをたくさん持った人々が並ぶ人気の湧水地である。近くには八風峠（九四〇ｍ）の登山口もあり、その麓に位置している。この先は三重県菰野町と結ぶ石榑トンネルがあり、比較的滋賀県側からも三重県側からもアクセスしやすい場所である。古くは中山道の武佐から東海道、桑名と四日市の中間地点を結ぶ八風街道沿いに位置しており、近江商人や伊勢参りの旅人が行き交っていた場所である。

さて、いつものように水を汲み、案内表示に目を向けた。比較的派手目な表示である。読むと、

「名水 京の水　遠く江戸から伊勢路から鈴鹿を越えてここ近江の里　遥かなる京の都に思いを馳せる時　幾多旅人の喉を潤し心を癒してくれた事か　この水も地名もいつとはなく旅人が名付けたのだと伝えられる　古より今も尚限りなくこんこんと湧き出づる清水



名水京の水の案内板

竹筒から勢いよく出る名水京の水

名水京の水を汲む

大自然の慈みに心から感謝し　私たちの大自然を大切にいつまでも後世に伝えましょう　国定公園　鈴鹿　自然愛護会」と記されていた。

「なるほど、京の水はやはり旅人が名付けたのか。」なぜ、滋賀と三重の県境に京の水なのか疑問に思っていたのだが、遠く江戸から伊勢参りを終え、京に向かう最中、鈴鹿山系の山越えを終えた直後にこの水に出会い、旅人に取っては助け水であり、旅のモチベーションを上げる水であったのであろう。また彼らに取って「京の東の境界が」ここであったのだと渓谷の景色を見ながら想像した。

すると後方から声が聞こえ、水場をゆずった。

己知の冷水（こちのれいすい）

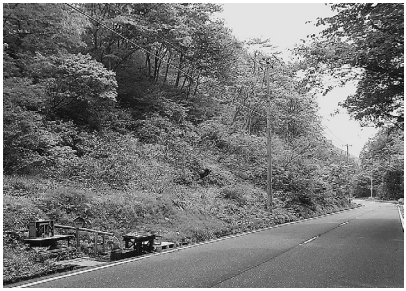
福井県と滋賀県の県境を走る国道３６５号線旧北国街道沿いに中河内という集落がある。集落に差し掛かる少し手前の小さな峠東側にその水はある。旧伊香郡（現長浜市）余呉町中河内は、余呉町側から椿坂峠の急坂を登り、栃ノ木峠との間に位置する滋賀県北限の集落である。

始めて訪れたのは二〇一〇年の二月である。県内でも豪雪地帯として有名であり、恐る恐る車を走らせ近づいた事を思い出す。到着後、中河内集落に車を止め、現地の人に聞く事にした。周囲をウロウロすること数分、集落の中央に位置するバス停でやっとの思いで出会ったお婆さんに聞くこと、「３６５号線を余呉方面に少し引き返した道端にある。」と教えて下さった。私は見過ごさないようにゆっくり歩き出し湧水を探したのだが、一面白い壁に覆われた風景から、それらしきものに出くわさない。道の両サイドを丁寧に見ながら中河内集落との間を往復すること数回、二時間程探し歩き、日が傾き寒くなってあきらめかけた時、雪の壁しか見ていない事に気付いた。もう一度ゆっくりと歩き凝視していると何やらソフトボールくらいの穴があいている。その奥を覗き込むと水が流れているのが見えた。周囲は雪で完全に覆われ、水場の雰囲気がかき消されていた。二度目に訪れたのは二〇一二年初夏の頃、緑が茂る中、湧き出ているところにパイプが突き刺され、水路が設置されていた。木製の表札には「みんなが選んだ己知の冷水」と書かれており取水口の隣には祠が立っていた。この他柄杓やコップ等が棚に置いてあり、道行く人が一休みし易いよう地元の人が世話をしているのだろう。

地元の小谷輿一さんにお話を伺う事ができた。己知の名前の由来は渡来系の己知部（こちべ）と呼ばれる人々が敦賀谷口から中河内を結ぶ「庄の峰越え（敦賀道）」の往来があった。その道の分岐点にこの水があったのではなかろうかと。現在は「ちこべ谷、ちこべ坂」という地名は残っているが、関係はわからないそうである。ここからもう少し福井県との県境まで国道３６５号線を北上し栃ノ木峠辺まで来ると「淀川の源」と彫られた立派な石碑を見る事ができる。栃ノ木峠は、二〇〇五年に

社団法人日本山岳会によって踏査された中央分水嶺に位置しており、日本海側と太平洋側へと水を分ける地である。そこから引き返す途中「己知の冷水」の前で再確認した。「この水は淀川水域で最上流に湧き出た水なのだ」と。

小谷さんとお話しする中で新しい情報がわかった。二〇一三年に土地の所有者が変わった事により、更に水場の整備が行われたようである。常々ドライバーの休憩で交通停滞を起こしかねない場であったそうだが路肩に車を止め、一休みできるようになったそうだ。近々確認に行きたい。


峠道にある己知の冷水

栃ノ木峠にある淀川の源の石碑

雪の穴にある己知の冷水

小関越えの水（こぜきごえのみず）

京都山科から大津宿間の旧東海道は二つの道がある。一つは本道である逢坂越え、もう一つはその北側を通る裏道で、逢坂越えを「大関越え」と呼んだのに対し、小関越えと呼ばれ北国海道（西近江路）を結ぶ近道として知られている。現在のバイパスにあたる道と言ってのよいだろう。京都山科側の旧東海道横木一丁目（大津市）には常夜灯と大きな道標が建っており、「三井寺観音道」「小関越」と刻まれている。そこは、大関越えとの京都側の分岐点となる。対して大津の中心、札の辻（現在の京町一丁目）は旧東海道と北国海道が交わるところ、ここが近江側の分岐点だ。

今回は「近江の水をめぐる」ということで近江側から水場を目指す事にする。北国海道を三井寺方向へ、少し歩くと鍵曲がりになっており三井寺方向へ、すると小関越の道標が見えて来る。ここから西へ上り道、途中小関天満宮の大鳥居が見えて来る。更に一本道をピークまで登りきると「喜一堂」という東屋があり、地蔵尊の祠（ほこら）があった。中を覗くと延命地蔵が祀られてあり、地域住民によって守られている事が伺える。その対面に湧水をパイプで引いたアルミ製のタンクが設けられ

ていた。二〇一二年五月に訪れた時にはパイプが抜けており、石垣の上から溢れ出る湧水を汲んだと記憶している。峠越えする人の休憩スポットのような場所になっているのであろう。いつものようにそこに立てかけてある由緒書き?を読んでみた。三首の短歌で説明がされているのだろうか?

地蔵喜一堂に寄進

あら草の　中に放置されし　地蔵尊　うやまひ祭らる
ここ喜一堂に

夏空に　風の織りしく　峠道　緑（あお）葉がくれに
鎮もるみ堂に

念じ入る　心通じし　かたぎつ水　あふれ出でけり
み堂のまえに

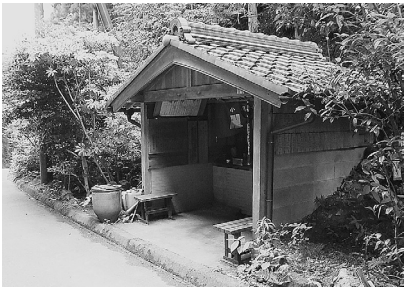
短歌献上者　梶谷花子　平成四年七夕月　喜一堂

想像するに地域の人々により野に放たれていた地蔵様を祠に集め、湧水が汲める場所を整え、献上されたのであろう。

比較的新しい水場である事は間違いない。現在も大関越え（逢坂越え）と比較して交通量の差は歴然としている。稀に自動車が走り過ぎ、すれ違う人はおそらく、私と同様に小関越えを楽しむハイカーであろう。全長四キロ程の裏道ではあるが、地域信仰が持続され、往来する人とのコミュニケーションが峠のピークで水場を通して行われていると感じた。

今回は、峠道や県境に位置する湧水に焦点を当てた。国と国の境は文化の境目でもあり、情報の交わる場所、生活圏の切れ目、何かの糸口や切っ掛けとなる場であろう。

信州安曇野においては道祖神の祀られる場所が集落の境目であるように、どちらサイドのものでもなく、所属しない。中間的な存在を地域の人々が誰となく維持し、守られてきたものと


小関越えの水の対面にある喜一堂

石垣の上から流れ出る小関越えの水

峠のピークにある小関越えの水

言って良いだろう。そのような場所にも必ず「水」は存在し、時代を超えて人々を癒し、潤してきたのである。

誰のものでもないが現在にまで脈々と持続される。そのようなものが「峠」や「境」には象徴的に存在しているのだと、あらためて感じた。

現代におけるメディア社会の語源「メディエ」はモノとモノとの間をつなぐなどの意味がある。それは他ならぬ誰かが設定したものであろうが、その本質を敏感に感じ取り反応する。そして次世代へ向けて新たに更新し、持続することが境目や、間（はざま）に立ったものが行う事ではないだろうか。

三、呼ぶ水、続く水（よぶみず、つづくみず）――

湧水の大物、横綱クラスに注目してみた。現在の状況を伝えながらも、今日における様々な地域問題を抱えつつ、住民の意識や工夫、苦労などが伝わってくる名実ともに横綱クラスの湧水に迫ってみたい。紹介する三つの湧水はいずれも名水の称号を冠している。中には複数の称号を冠している湧水もある。名水の称号を獲得するにはそれなりの理由があるはずである。参考までに名水百選の選定基準をみることにした。

『名水百選』は昭和六〇年三月、全国各地の湧水や河川の中から一〇〇ヵ所選ばれました。（選定基準）『名水百選』に代表される全国の優れた水環境は、その地元の方々ばかりでなく、そこを訪れる全ての人の心配りなくしては、将来にわたって保全・継承していくことはできません。我が国の「優れた水環境」を次の世代に受け継ぐために、皆様方の環境保全に対するご理解とご協力をお願いいたします。なお、『名水百選』は選定から二〇年以上を経過しているので、周辺の状況が変化している可能性があります。また、飲用に適することを保証するものではありませんので、飲用に供される場合は、その名水が所在する自治体にご確認ください。

と記されている。

滋賀県内において、人々を呼び、この環境が持続される名水に迫ってみたい。

泉神社湧水（いずみじんじゃゆうすい）

米原市（旧伊吹町）大清水にあるこの湧水は国道３６５号線を伊吹山を仰ぎ見ながら東へ関ヶ原方面に進むと、大野木という交差点がある。そこを左折し、数百メートル程走ったところから、湧水誘導の案内が始まる。車が一台走れる程度の道幅で地元の人々によってであろうか案内板に従い進むと泉神社に到着。驚いたことに車が十台程であろうか、集落の小道の脇に導くように駐車スペースが設けられていた。ボトルと柄杓を持ち神社に近づくと何やら賑わっている。秘境の温泉地を訪れるよ

うな雰囲気である。鳥居の前は他府県ナンバーの車の出入りが激しく不思議な感じがする。横目に先ずは鳥居をくぐると泉神社湧水御神水と彫られた立派な石標が建っている。目を左に向けると石垣の合間から水が手前へ吹き出ており、岩の上に祠が建っている。ここが水源のようだ。更に急な斜面の石段を上がると社殿がある。参拝後、鳥居横まで戻ると、御神水拝受所と書かれた看板が東屋にかかっており、中心に人が集まっている。石積みの取水口から四方八方にホースが延び、勢いよく水が湧き出ている。ポリタンクやボトルを大量に持込み、車の荷台との行き来している人が多く見られた。人々の隙間にホースを見付け、水を汲むことができた。こんなに満員の水場は記憶に無い。恐るべき名水百選！環境省が昭和六〇年七月に選定した名水である。

環境省によると伊吹山麓に源を発し、石灰岩の岩間を縫い神社境内に湧き出したもので、ミネラルを含んだ清く、美しく、うまい水。平均気温十一度の冷水で、一日の流水量は約四五〇〇トンと豊富で良好な水質である。由来は、天智天皇がこの地を弓馬練場と定められ、人々が住居を構えた際、湧き水がでて川を形成したとあり、以後「天泉所」と呼ばれ、地名も大泉から大清水と改名された。伊吹三名水の一つ・日本武尊の居醒の水・小栗助重が病の平癒を祈願された命乞いの水として由緒深いものである。と示される。水の保全活動は積極的に行われ、地元住民はこの水を神のごとく大切にしており、清掃活動はもちろんのこと、用水管理については水利組合の規約により、昔から引き継がれ、優良な水環境の保全・保持に努めている。また、地元では「泉神社湧水保存会」が発足しているとのこと。

近年の湧水に対する眼差しの変化で多くの人々が水を汲みに訪れる。汲む人のマナーが問われ、近隣の住民への配慮が問題になっているが、こ

隙間を見つけて汲水する

御神水拝受所にて

泉神社境内に入るとすぐに石標とその後ろに水源が現れる

こでは住民による態勢づくりや、導きの姿勢を感じる。帰りの道案内も訪れる車と別の道に誘導するなど、再び訪れたいと感じた。このような、人が集まる仕組みを、形成した水場はお互いの関係を崩すことの無いよう持続したいものだと思いこの地を後にした。

御澤の神鏡水（おさわのしんきょうすい）

近江と伊勢を結んだ八風街道（現在の国道４２２号線）と中山道（現在の国道８号線）友定町の交差点より東近江方面に走り、近江鉄道の踏切を越え平田駅（近江輿地誌略によると以前はこの辺り一帯を平田村と呼んでいた。）を左手に田園地帯が広がったところを南西方向へ、すると右手に標高二三四メートルの瓶割山が見えてくる。その麓に上平木という集落がある。その入口付近に通称「おさわさん」として地域の方々から親しまれている御澤神社が鎮座している。東方に参道がのびており、拝殿の前辺に水場がある。そこはきちんと整備がいきとどき、水を汲みにくる人を迎える態勢が伝わってくる。木造の東屋にはしっかりとした石の土台が組まれ、龍の口から蛇口が出ており勢いよく水が出ている。前には「近江の名水　御澤の神鏡水」と彫られた角柱型の石碑が立ちその隣に酸素ボンベを改造したような賽銭箱が並んでいた。東屋には「神の姿うつれる水鏡　けがしにごすな　集う人々」と書かれた木板が掲げられている。

いつものように写真撮影の準備に取りかかると、お参りしてから水を汲む参拝者やジョギング途中に水分補給をする中年男性など、拝殿と参道の分岐点となっていることから近所の方々が二言三言語り合う憩いの場となっている。全く人が絶えることがない。水場としての風情を求める場ではなく、地域の生活の水として息づいていることが良くわかる。参道には多くの献灯が立ち、並行してみごとな藤棚が保持されていることから地

水場の前に石の表札と由緒書が立つ

参道左側は藤棚が続く

整備された水場も遠景に箕作山と太郎坊

域に支えられていることが伺える。一の鳥居を出ると田園風景が広がった。向こう遠くに太郎坊山を望むことができる。

神社の由来を読むと、この神社は推古天皇十二年に聖徳太子が荒地を開いて池沼を掘り、美田を造成、鳥虫害を除き、天災地変の厄を祓って、五穀豊穣を祈念するため龍神を勧請して開基した霊所とある。境内の霊泉は農地灌漑の水源地として穀物が豊かに実り、水不足や産婦の悩み、諸病平癒など諸々の願を叶えてきたと示されている。

聖徳太子が蘇我馬子に命じて、この一帯を開墾した時、ため池として清水（きよみず）池、白水（はくすい）池、泥水（にごり）池の三つの池と御澤神社をつくったと、そのほとりに市杵嶋媛命（いちきしまひめのみこと）を祀られたことにはじまると伝えられている。白蛇がすんでいたという白水池は、細長い池で隣の濁池とつながっており、池の地下からわき出す水は本殿前にも引かれ「神鏡水（しんきょうすい）」として授けられている。

十王村の水（じゅうおうむらのみず）

県道２０６号神郷彦根線を南西方向に進み、西今町南の交差点に差しかかったところに水場が有る。南側の角が一段下がっているのに気付く。発見するが車で進むと交差点ゆえ通り過ぎてしまう。近辺をウロウロしながら、交差点に近づきながら一時駐車する場所を探すのに焦っていると運良く、近所の方を見つけることができた。事情を説明し、路地内に止めさせていただいた。歩いて交差点に近づくと想像以上にジャバジャバとした大きな音が聞こえてきた。興奮を抑えながら角から覗きみるとキラキラと光る水面の中にウヨウヨ泳ぐ何やら大きな黒い影が見えた。交差点の南側コーナーに正方形の一角を切り取った変形五角形の石の柵で囲まれた池が「十王村の水」である。その真ん中には六角形のお堂があり、石橋を渡って行くことができる。中には地蔵が祀られているようだ。屋根は柿葺きで一番上の中心部には銅製の宝珠がある。お堂を挟んで右側の池には石柱が二本有り、左側には「湖東三名水　十王村の水」右側には「名水百選　十王村の水」としっかり彫られている。後方に木製の由緒書が取付けられている。

「この地蔵堂は、淡海地誌によれば元禄年間には、湖東三名水（十王村の水、五個荘清水鼻の水、醒井の水）の一つである十王村の水として世に知られ、各方面に利用された。有名な由緒ある水源地の中央に位して建立せられ、その祭神はおそらく水神或は竜神として祭られ、いつの世にか地蔵尊として祭られるようになったのではとの説も伝えられています。又、昔より母乳の地蔵尊として産婦の乳の出ない時はお願いするとたちまち乳を授かり、不用になればお預けに行けば乳が止まると伝えられています。」

と記されている。以前は十王村と呼んでいたのであろうか？

さて、石橋を戻り本題に入る。次は左方向へ石段を更に降り

水面に近づいて行くと石の柵に一つ岩がへばりついている。岩には綺麗な苔が産しており、その中央上部に青竹が突き刺さっていた。そこから勢い良く水が湧き出ており、水面に落ちると泡になり水中に酸素をたくさん送り込んでいる。「そうか！」と私は一言、声にした。あえて説明するが、水を通して人間、鯉、石、苔の生死の縮図がここにあり、この空間で輪廻が起っているのだと直感した。そして、この水場を持続させてきた地域の古人と今人が脈々とつながっていることを。そんなことを考え汲水していると、近所の方であろうか、「いつもの水」を汲みに来られたようなので場所を譲ることにした。ここを訪れる時はいつも決まって夕方になる。当然、夕日が差込んでくる時間である。出入口は東側、そうするとお堂も水場も西向きになる。西方浄土と今がリアルに繋がっている場所なのであろうか？西今町。

お堂の右側は石の表札と由来書が立つ十王村の水

交差点の南角に位置している十王村の水

お堂の左側で水を汲む十王村の水

四、山の水、祈りの水（やまのみず、いのりのみず）

近江は四方を山に囲まれ、真ん中に大きな湖をつくる地形である。湖西に比良山系、湖北に伊吹山系、湖東は鈴鹿山系といずれも千メートルを超す山々が連なっている。この山々にたくさんの雨を含んだ後、谷間に水が集って川となり平野部に注がれる。一方湧水はゆっくりと地面に染込み山裾や地形の変化がある場所に水が湧き出ることが多い。ところが比較的山頂に近い、高度の高い場所に湧き出る水がある。このような場所に何故今日も持続的に水が出ているのであろうか、近江を代表するそれぞれの山系にこのような水に出会うことが出来た。その背景に迫って行きたい。

金明水（きんめいすい） 鈴鹿山系 綿向山八合目付近

蒲生郡日野町は江戸期に近江日野商人で栄えた町である。国道４７７号線を東南東方向に進み日野の辺まで来ると「杜」に突き当たるが左方向に迂回するように道路が走っており、そこを過ぎると目前に立ちはだかる山がある。標高一一一〇メートルの綿向山である。音羽の交差点を左折し北畑の集落をすぎたところに西明寺口のバス停がある。トイレ、登山案内板のガイドマップがきちんと整備されており気持ちがいい。右折して少し進み、御幸橋を渡ると駐車場もあり登山客の受け入れ態勢が整っていることが伺える。小川沿いに進み砂防堰堤を過ぎ、表参道登山口に着くと登山届を提出し、いよいよスタートだ。四ルートあるうちの初級、表参道から登ることにした。登山道は整備が行き届いており歩き易い。五合目には赤い屋根の避難小屋がある。振り向くと日野の町並みが見える。七合目には役行者が祀られており、行者コバと呼ばれている。七世紀頃から山岳信仰の対象として崇拝されているようだ。八合目水無山北尾根の登山道分岐点がある。右方向へ谷を下りると少し凹んだところに直径二〇センチ程の光るものが見えた。「森の中のキラキラの水源だ！」木漏れ日が水面を写し美しい。案内板が無ければ見落とすかもしれないが太陽が写し出してくれた。早速、柄杓で水を汲み、口に含む。汗が吹き出し疲れた体に恵を戴いた。九合目付近からはブナ林に植生が変わり澄みきった空気を感じる。そこを過ぎると最後の急坂階段である。顔を上げると青空を背に木製の鳥居が見えた。頂上で直ぐに目にするのは木製の祠である。天穂日命（あめのほひのみこと）が祀られた大嵩（おおだけ）神社であり、毎年四月二〇日に嶽祭りが執り行われている。大嵩神社は日野あたりで迂回した「杜」である馬見岡綿向神社の奥宮にあたる。綿向山は水の源、そこに祀る綿向大神（天穂日命）は日野渓の総産土神として、春に里へ迎え、

金明水を汲む

綿向山山頂、奥宮の鳥居が迎える

登山道から見える金明水

収穫あるいは生活の御守護を戴く為とのことだ。一千数百年前より続けられてきた神事であり、日野祭（馬見岡綿向神社の春大祭五月二、三日）につながる神迎えの祭事である。私が訪れた十月中旬は台風一過の後であり雲一つない快晴であった。三重県側の鈴鹿山系がクリアに見え、伊勢湾を望むことが出来た。目を北東にむけると一つだけ立ち上る雲影が見えた九月に突如噴火した木曽御嶽山である。たった今、恵をいただいた直後に遠からずして脅威を目の当たりにした瞬間であった。

下山途中、三合目のあざみ小屋を修復している横山昇さんにお話を聞くことが出来た。十一月十日の「綿向山の日」の準備をしておられた。一九九六年から毎年続いており、「住民に親しまれている綿向山を故郷の山として町の活性化に生かそう」という主旨だそうだ。これは「綿向山を愛する会」の試みであり、約一三〇名が日々山の保全活動をされているとの事。「八合目の金明水は千メートルに位置しており、以前、七合目付近に銀明水と呼ばれる取水口を確認した。」とのお話も聞く事が出来た。　綿向山、水の源に新旧の形を変えたコミュニティが山を仰ぎながら今日に持続されている姿がここにある。

ケカチの水（けかちのみず） 伊吹山登山口付近

関ヶ原と木ノ本を結ぶ北国脇往還がある。現在は国道３６５号線がその役割を果たしていると言えよう。高番の交差点を北側へ入るとなだらかな坂道が始まっており滋賀県最高峰、伊吹山（一三七七メートル）の裾野を感じる。この辺は春照（すいじょう）と呼ばれ宿駅の地であり伊吹山系の水があちこちから湧き出ている地である。更に進むと上野区、三之宮神社にたどり着いた。登山口のゲートを過ぎてしばらく歩くと右手に注連縄にまかれた大きな石が一つとその隣に杉の大木がみられる。足元を見ると細い道がのび石の下側へと導いている。石の下の穴を覗くと大量に水が湧き出し、勢い良くこちらへ流れ出ている。そこは標高二四〇メートル付近である。登山道沿いには案内板があり「ケカチの水」と紹介されている。読むと江戸期までは山岳修行の山であり、行者達はこの水で清め、行場を巡りながら山頂を目指したとある。伊吹山は、奈良時代にすでに修験の道場として開かれていたらしく、平安時代前期には三修上人が入山、その後、円空や槍ケ岳を開山した播隆上人も足跡を残した。山頂の弥勒堂を一之宮、磐座のあるシャクシの森を二之宮、登拝口を三之宮としたと考えられている。さてカタカナの「ケカチ」であるが案内板を読み進めると、

修行のひとつに「悔過の行」仏の前でこれまでの罪過を悔い改め、心身とも清浄の境地になって天下太平・五穀豊穣などの祈願するものです。かつてこの辺に「お池さん」と呼ばれる泉があり、「悔過（けか）の池（ち）」からきているようです。またこの水はヤマトタケルノミコトが熱を冷ました「命の水」とも伝えられています。上野区

とある。現在も生活、消雪、田畑の用水として利用されている

ようである。以前二〇一〇年初春に訪れた時は、大雪の影響であろうか案内板が傷ついており、倒れていたと記憶している。再訪した二〇一二年には新調されており、上野区の住民の方々が登山者を招待する気持ちと地元に伝わる聖なる水を大事にする気持ちが伝わって来る。二〇一四年の十一月には今年５月から登山者に入山料を取る実験的な試みなされていると報道されていた。今日のちょっとしたトレンドになっているのであろうか登山客が増えているようだ。当然、環境整備事業の資金となって山は美しくなるのであろう。人間が自然と対話しながら山へ歩み寄るのであろうが、時には我々の想像に及ばない猛威をふるうことがある。私は看板を架け替え、山を整備し、守る上野区の方々に感謝しながら水を汲んだ。

ケカチの水の案内板

ケカチの水と石と大木

ケカチの水を汲む

天命水（てんめいすい） 比良山系 打見山山頂付近

比良の霊峰と言えば何処を示すのか、最高峰は武奈ヶ岳（一二一四・四メートル）であるが残念なことに山裾からその山様を仰ぎ見ることが出来ない。となるとＪＲ湖西線などから見て真っ先に目にする蓬莱山（一一七四・三メートル）あるいは打見山（一一〇八メートル）といったところであろうか、びわ湖バレイでにぎわうこの二峰は比良山系を象徴する山といって良いであろう。琵琶湖から見て右側に位置している打見山には頂上付近にゴンドラの山頂駅が見えるそのちょうど真下あたりに水場が存在する。石製の鳥居の扁額に「天命水」の文字が見られる。その間の岩陰から水は湧き出ている。普段は山麓からの登山者の山頂前のお助け水になっているのであろう。私も吹き出る汗を拭い、一口含むと疲れが癒され蘇ってくる感じがした。振り変えると眼下には琵琶湖西岸がハッキリと見え、ＪＲ湖西線を追っていくと、南湖の形まで遠望できる。

この水は春の訪れに象徴される恒例の法要「比良八講」に安

全祈願として汲水される水である。「お水取り」で有名な奈良東大寺修二会と並び、神仏への信仰が今日まで継承されて来たことを実証する行事である。

比良八講とは最澄が比叡山で開山した日本天台宗の修法の一つ、「法華八講」という試験を兼ねた法要である。このころに寒気がぶり返し、突風が吹いて琵琶湖が大荒れになる。これは琵琶湖と比良山の温度差で突風が起こるものであるが、これを「比良八講（ひらはっこう）」と呼び、この日を「比良の八荒、荒れじまい」の日として、この法要が終わると湖国にも本格的な春が訪れる、とされる。鎌倉期に興った庶民救済の仏教宗派へ転宗し途絶えるが「比良八講」という言葉のみが残る。

昭和三〇年、比良八講の法要は、比叡山の飯室谷の箱崎文応大僧正によって再興され、今日に至っている。

三月九日、安全祈願祭が日吉大社西本宮にて始まり、三月二二日のお水取りは、打見山山頂近くにある延法寺において比良八講に献じる法水を天命水と呼ばれる湧き水より取水し、これを比良三尊（観音菩薩、不動明王、毘沙門天）に供え、法華論議法要（三問一答）が執り行われる。このお水取りの儀式は、修三会（しゅさんえ）と呼ばれる。三月二六日 大津の本福寺出発、市中お練り、桟橋法要、湖上法要、ここで打見山山上の天命水を湖上に送水し湖水清浄を祈願する。その後、近江舞子浜お練り、採燈護摩供が執り行われる。

天命水

天命水を汲む学生

天命水付近からの眺望

近江における山と湖の関係は根深いものがある。湧水に迫ることが我々の住む近江の地の起源に迫るといっても過言ではないであろう。いつもの事であるが湧水を発見した時の興奮は忘れられない記憶となっている。特に山上においては疲労と不思議のダブルショックである。繰り返すが水道の無い社会というのが私には想像がつかない。そう考え人々が水を囲んで文化が

育まれて来ていることを確信するのである。

追記

二〇一二年十二月より滋賀県文化振興事業団が発行する「湖国と文化」に〝近江の水をめぐる〟と題して近江の湧水を写真と文で紹介する機会をあたえられた。現在まで九回の連載が継続されており、六回から九回の四回分のオリジナル文章を可能な限り残し、近江学研究紀要として再編集した。紀要の冒頭は二〇一五年一月現在における私自身の現況報告から始め、次に地域社会をつなぐ水として「結いの水、集いの水」、県境に有することから近隣住民が互いの暗黙で維持する「峠の水、境の水」、湧水に関わる伝承が今日も地域住民のみならずる遠方からの来訪者を招き入れている「呼ぶ水、続く水」、山でのお助け水であり山岳信仰や太湖への畏怖対象となっている「山の水、祈り水」に焦点をあてた。

あらためて気付いた事に、いずれも地域のコミュニティ形成の大きな要因になっていることである。これは高度情報化社会がもたらしたバーチャル空間での情報共有といった事ではない。顔を会わさずとも水場の形成と持続において、利害関係や管理責任の問題を超えて、誰もが豊かな日常生活を継続出来るよう水場を見守られている環境が今日まで持続されていることである。誰という事も無く、常に誰かが手間をかけ世話してきた痕跡が水場に残っていることがわかる。

近江には、いつからか語られてきた有名な言葉に「三方よし」がある。その最後の「世間よし」は、近江を行き交う人々を対象に自然に身に付いた精神ではないかと想像する。そして多くの様々な種類の情報を得る事ができた近江の人々は時代状況を読み取り、様々な生業を生み出したのであろう。「世間よし」は近江の地において己だけが抜きに出て富を得るのでなく、総じて幸せである事が豊かさを持続させる事であると、いち早く気付いていたのではなかろうか。近江の水をめぐる最中、ふとそのような事を考えるに至った。

今日我々が抱える様々な問題と、社会が要求するヒントが「近江の水と暮らし」の中に隠れているのかもしれない。

成安造形大学附属近江学研究所紀要　第４号

発行日　平成27年３月23日

発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学　附属近江学研究所
〒520-0248　滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　077-574-2118

発行者　木村 至宏

編　集　成安造形大学附属近江学研究所

印刷所　宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2015

ISSN 2186-6937